



琉球放送報道局報道部記者

砂川 裕

アクアポリスの売却！ 解体から考えたこと

印象に残った取材から

思い出を何度も反芻させる出来事が去年ありました。アクアポリスの売却、解体です。まさか記者として二十五年の歳月を経て再びアクアポリスの中に入るとは夢にも思っていまませんでした。入り口の長いエスカレーター、闇の中で下がる魚の模型、その背景に描かれた海底基地。わくわくした思い出を胸にしみておきたかった私にとって、廃墟と化した巨大な夢の跡はやはりショックでした。そしてアクアポリス見収めの

といった課題を突きつけたのです。一九七五年。復帰直後の当時は沖縄の進むべき方向に関して「本土並み」という目標の下ある程度「コンセンサス」があったように思います。海洋博の開催がこうした方向性を強く後押ししたことは周知の事実です。沖縄にとって目標とされた本土（日本）もまた経済発展の向こう側にハッパ色の世界を描いていたと言えます。夢の海上都市、アクアポリスはそのひとつの象徴だったのかも

海洋博会場から伸びる車の列は果たしてどこまでつながっているのか。那覇の我が家が途方も無く遠い場所と感じられ（実際今よりもそこははるかに遠い場所でした）、会場で打ち上げられている花火の音が意識の中で徐々に小さくなり、やがて私は眠りについていました。一九七五年。当時小学校の低学年だった私は家族といっしょに国際海洋博覧会に出かけました。楽しかった思い出が印象深く残っています。その

当日。取材のヘリが上空で旋回する中、アクアポリスをつなぎとめていた鎖が切り離され、中国に向けて曳航され始めるとひとつの時代が終わったようにそんな思いにとらわれました。那覇港沖に再びお色直しをして姿を現すはずだった観光資源はスクラップにされました。二億円という破格の値段で国から譲り受けたアクアポリスは、結局多額の負債を残し、観光資源開発の難しさ、第三セクター方式の経営の甘さなど

しれませんが、海洋博の開催からあぶりだされる事柄は、当時の人々が、目標としてその向こう側に共通の夢をもっていたということではないでしょうか。夢の通過点？なる現在をどう捉えるのか。環境問題を例に挙げるまでも無く、検証が必要なのは論を待ちません。当時描いた夢の多くは破綻しているともみるむきもあるでしょう。しかしここにはあえてその言及を避け、気になしている問題を指摘したいと思ひ

ます。それは今私たちはどんな共通の夢（理想的な沖縄の将来像）を描くことができているのかということであり、誤りを恐れずに言えば、将来像からの逆算では無く様々な振興策などを含め目の前の事柄が自己目的化されてしまっているのではないかといい事です。去年の取材でもひとつ印象に残っているのが鉄道導入の問題です。こうした議論になるとすぐに出てくるのが採算のはなしです。たしかに厳しい財政状況の中で採算の問題は非常に重要で避けては通れません。しかし本来沖縄交通の将来像をどう描くのか、その中で果たして鉄道は必要なのかという事が優先して考えられるべきです。目の前のテクニカルな議論に陥ってしまうのは本末転倒です。

海洋博の開催から四分の一世紀が過ぎました。二〇二五年、二〇五〇年の沖縄はどうあつてほしいのか、あるいはどうあらねばならぬのか、そこから逆算して考える必要があるのではないのでしょうか。日々の取材に追われながらあまりにもずっと世紀超えをしてしまった自分自身に対する自戒と、一方でもしかするとかつてのような夢（将来像）を描くことはもはや不可能になつてしまったのではないかと、一末の憂いを込めて文章をつづった次第です。